

## 意味に関する Osgood と Bousfield の理論の検討

松 原 敏 浩

### 1. 目的

本研究は、「意味」に関する Osgood と Bousfield の理論を検討しようとするものである。検討しようとする点は、次の3つである。

- (1) SD法の心理的 Process は、従来は Osgood の考え方によって説明されて来たが、Bousfield のいう連想によっても説明可能であるか。
- (2) 言語学的意味での反意語は、心理学上、特に Verbal Behavior において反対と考えてよいか。(Osgood の理論の検討)
- (3) Meaning Conditioning の心理的 Process は、従来、Staats (Osgood) により説明されて来たが、Bousfield の連想によっても説明可能であるか。

### 2. SD法についての Bousfield の説明の検討。

- (1) の点を検討するために、次の2つの仮説がたてられた。仮説(1) SD法においてある刺激語(概念)がPolarに判断されればされるほど、その概念からその Scale term への連想は多くなる。仮説(2) 刺激語からの制限連想反応数で、大、中、小の反応語をそれぞれ取りだし、それらを Scale term としてその刺激語を判断させた場合、連想反応数と SD Score の polarization とは有意義な相関が得られる。

## Ⅱ 調査 I

目的……仮説 I を検討する。

方法……刺激語の選択、日本には Standard な、内包的意味の辞書がないので、筆者が、評価的次元において、大体、positive 高、中(低) neutral, negative

(註1) 雨、こわい、日曜日、建物、ナイフ、協力、母、呼吸、バラ、国連、罪、鐘、苦痛、戦争、友情、過失、平和、空腹、危ない、病気、足、いす、幸福、あくま、新聞、うまい、家庭、元素、どろぼう。

(註2) 本研究は連想数最大値は、40であるが、Osgood 1,008まで可能である。

低(中), negative 高になるよう次の29語をえらんだ。<sup>(註1)</sup>

Scale の選択……相良氏(1961)の意味の次元より、評価的なものとして、よい—わるい、楽しい—苦しい、巨大性として、大きい—小さい、強い—弱い、力動性として明るい—暗いをえらんだ。

被験者……一宮高校1年生40名。

手続……連想、刺激語からランダムに近い形で配置された Scale term への制限連想をさせた。

SD法は、Standard な instruction により、29の刺激語を前述の5 Scale で評定させた。

結果 個々の SD Score を Osgood にならぬ12段階に区分し、概念の SD Score とその Scale term への連想数との関係をとって見た。SD Score とその Scale term への連想数との相関は、0.97であった。また、その対応を図示したのが図 I である。なお、比較のため、Osgood の結果も図示した。Osgood のものは、SD Score とその Scale term の自由連想反応を対応づけたものである。図 I からわかる如く、Osgood と本研究の結果とは、著しい相違がある。すなわち、本研究では、きれいな右下りの曲線であるのに対し、Osgood では、右端で極端なまでに上昇している。これは、自由連想反応では、反対語への連想が顕著に見られるためであろう。ともかく Osgood は、この結果から、Bousfield の理論は、SD法の心理的 process を十分説明できないとしたのであるが、SD法の事態と連想のそれを等しくする事を目的とした本研究では、SD法は、Bousfield の理論で十分に説明されるのである。

## 調査 II

目的……仮説 II の検討。

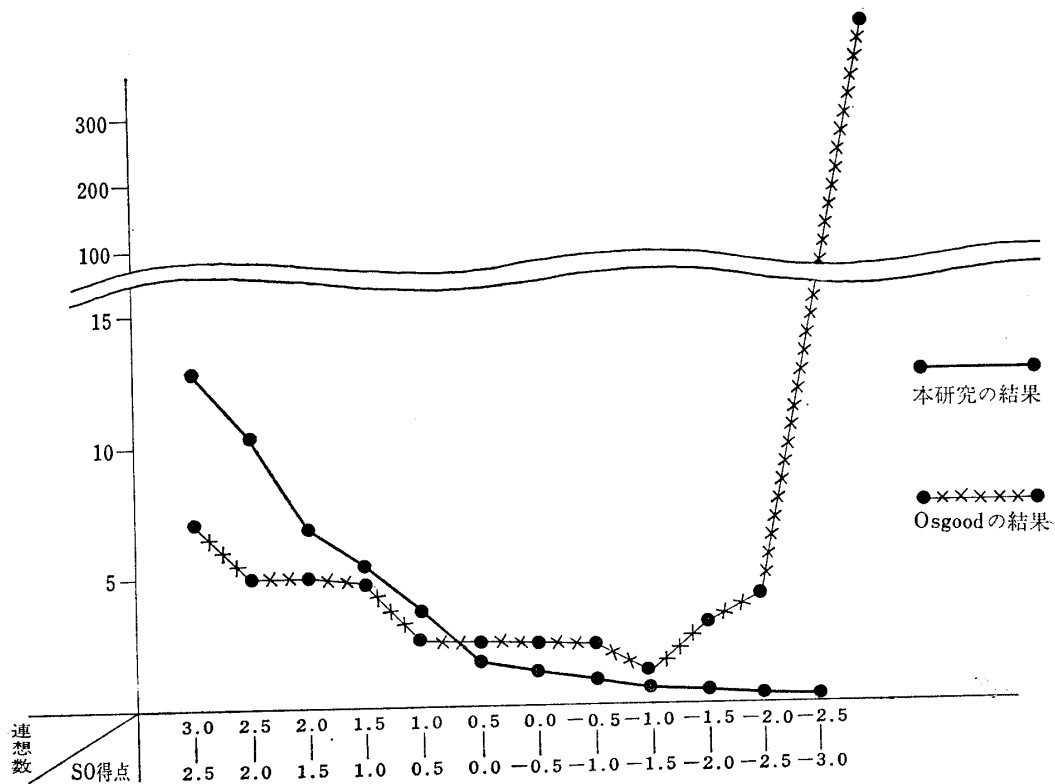
方法……刺激語および、Scale 選択、秋田氏(1967)の制限連想反応基準より連想数が高い、中程度、低いと位置づけられる Scale term を持つ刺激語が採用された。

被験者……古知野中学1年生40名

手続……Standard な教示によりSD法を受けた。

意味に関する Osgood と Bousfield の理論の検討

図 1 SD得点と、その Scale term の連想数<sup>(註2)</sup>



**結果** 連想反応数，高，中，低に区分し，polarity Score を計算したのが表 I であり，その分散分析が，表 II である。

表 I 連想反応数 高，中，低群の Polarity Score

群	平均	標準偏差
高	2.21	0.49
中	1.33	0.66
低	0.66	0.49

表 II 分散分析

要因	偏平方和	自由度	平均平方	F
級間	20.53	2	10.27	31.12
級内	15.63	48	0.33	
全体	36.16	50		

表からわかる如く 3 群の間には有意な差があった。また，高と中，中と低，高と低との平均値の t 検定をしたら共に有意な差が生じた。これらの結果は，Bousfield

の理論を支持するものである。

3. 類似語，反意語からの連想反応数。

(2)の点を検討するために，2つの語の類似度の Measure として，それらの2つの語を pair にして，それからの連想反応数を採用した。

Osgood らによれば，類似語は，意味的に最も近く，反対語，特に正反対語は，心理学的な意味では最も遠いから，連想反応数は，類似語において最も多く，反対語において最も少なく，その他の語を pair した場合は，その中間におちる。しかし，連想学派は，反対語も何らかの意味的類似性を持つという。したがって連想数は，類似語，（正反対語）反対語，その他の，word pair となる。

**方法** 刺激語の選択・相良氏（1961）のSD法による意味の次元より，道徳的評価，感覚的評価，巨大性，力動性の次元より，3 Scale 全部で24 word を採用した。このうち，感覚的評価，巨大性でAリスト，道徳的評価，力動性でBリストを作った。おのおののリストは刺激項内の順序をかえて，A<sub>1</sub>，A<sub>2</sub>，B<sub>1</sub>，B<sub>2</sub>にした。これらはまた提示順序も異なっている。

**被験者**……一宮高校1年生（Aリスト），付属高校

1年生(Bリスト)である。

**手続**……「2つの語を同時に見たり、聞いたりした時、連想する名詞を20秒以内にできるだけ多くかくよう」教示をした。

**結果** 得られた各群の平均連想反応数を表Ⅲにしめた。分散が大きいので、検定はしていない。

表Ⅲ

語群	A リスト		B リスト	
	M	SD	M	SD
類似語	45	7.2	118	11.1
正反対語	48	19.1	112	32.1
反対語	36	19.4	81	11.9
その他	37	12.1	94	24.4

しかしながら表Ⅲからわかる如く、A、B両リストとも、類似語、正反対語で、最も連想数が多く、反対語が最も少ない。この事は、正反対語が意味的に最も遠いとする Osgood の理論を支持しない。

また本研究では、連想反対数を意味類似の Measure として採用する事の妥当性を検討するために、SD法によって各形容詞間の類似度を求め、それときほどの連想反応数を対応づけた。類似度と連想反応数との相間は、Aリストでは、0.623、Bリストでは0.873であった。これは、連想反応数を Measure とする事の妥当性をしめしている。

#### Ⅳ Meaning Conditivng.

本研究は、(3)の点を検討すべく、連想と意味を分離しようとする試みでなされた。すなわち評価的に中性な無意味つづりにある群には、評価的に positive な word と neutral な word (US) を提示し、neutral な word をえらばせる。また他の群には、評価的に negative な word と neutral な word を提示し、neutral な word を選ばせる。しかしながら、これらの2群は、ともにCSに neutral な word を条件づけられながらも、同時に提示される word によって、CSのSD法の評定は前者は、neutral よりも negative に、後者は、neutral よりも positive に移行する。ところが、CSからの連想は、条件づけられた neutral な word であるというのである。

実験は中学3年生40名におこなわれた。

結果は、十分とはいかないが、上の予想を支持した。

#### 結 論

我々は、以上の結果よりいかなる結論を引きだすべきか。

最も安全な結論は、Osgood, Bousfield の理論とも心理学の現象、特に Verbal behavior の現象を説明する上において万能ではないという事である。Bousfield の理論は、確かに通常の有意味な刺激語が、SD法で判断される場合は、非常によくあてはまった。しかし実験的には、意味と連想とを分離する事は、可能なようである。

Osgood の理論は、正反対語を最も遠く位置づけたが、我々の採用した Measure に関するかぎり、これは適切とはいえない。では、正反対語は、どのように意味で類似しているのか、それは、今後の課題である。しかし本研究に関するかぎり、「それは、連想される刺激対象の denotative Meaning が類似している」とするのが適切である。